

春秋彩

Shunjusai

vol.58

熊本県立大学広報誌

2023
Spring



CONTENTS

学長あいさつ	2
特集 世界に伸びる人材育成へさらに前進	3
研究活動紹介	7
大学の動き	8
後援会だより	9
生き生き元気種	10
おすすめの一冊・人事情報	11
熊本県立大学アーカイブズ	12

春秋彩とは

万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。



春に想う、 大学で学ぶということ

熊本県立大学長

堤 裕昭

Tsutsumi Hiroaki

春が訪れ大学の新年の始まりに、学生諸君には大学で学ぶ意味についてあらためて見つめ直す機会を持っていただくことを願います。所属する各学部で、それぞれの分野の知識や技術を学ぶことは第一義的に求められることですが、それだけでは将来の社会で十分に対応できなくなる時代が到来しつつあります。IT技術が日々急速な発展を遂げています。その中で、皆さんはスマホという情報端末を持ち歩き、多様な情報を利用しながら、日々便利になる生活を享受していることでしょうか。近年ではAIが我々の生活に必要な情報を先回りして収集し、瞬時に提示してくれる環境も生まれています。前世紀で言えばまるで多くの侍従^{かしず}に傅かれたような生活です。ところが、それは市場の需要を調査し、その需要を満たす物資を調達し、必要な機器を開発して市場に供給する作業と共通することであり、今まで人が仕事としてきたことが、AIやAIの制御する装置の作業に置き換わりつつあることを意味しています。

このような社会変革の中で、我々はAIと向き合い、うまく利用しつつ、AIを上回る位置に自分自身を置

く努力が必要となってきました。AIと計算力を勝負してもその速さに追随できません。AIは世界中のインターネット網を利用して瞬時に情報を収集・解析して提示することもできます。ところが、それらは常識を集めたもので、新規性や創造性に溢れたものとはなりません。我々の脳神経回路の長さは約100万km、地球25周分にも相当します。その回路の中で様々な信号が錯綜することで、新しいアイデアや考えが生み出されてきました。そうです！考える力です！これは人間にしかできない能力です。

大学で学問を学ぶ時には、既存の知識や技術を修得する受け身の作業を多く含みますが、その学びをもとに「考える」こと、それを通して新しいことを見出す、見出そうとすることが、学びの上での重要度を増しているのではないのでしょうか？また、「三人寄れば文殊の知恵^{ことわざ}」という諺があります。3人それぞれが持つ100万kmの脳神経回路を組み合わせることで、さらなる新規性や創造性が生み出されるということでしょう。皆で学問を語り合いましょう。

Preăh Réachéanachâkr Kâmpŭchéa



世界に伸びる 人材育成へ さらに前進

いざカンボジア！
県大生6人が初のインターン



「地域に生き、世界に伸びる」という熊本県立大学のスローガンを実践しようと、2022年9月、6人の学生がカンボジアに渡航。現地の政府機関や民間企業、NGOで約3週間、実習実践活動(インターン)に汗を流しました。

本学では、地域に根差しながら世界を見据える人材を育成するため、1年次から全学生が参加する「もやいすと育成プログラム」を実施しています。さらに、グローバルな視点を持って活動できる学生を育成するため2020年度から、「もやいすとグローバル育成プログラム」がスタートしました。参加する学生はTOEIC®で550点以上を取るなど所定の語学力を満たすことが条件。英語でのディベートやディスカッションを中心とした講義などを通じて、世界でも活躍できる学生を育成します。

今回は、正式プログラムとして滞在費の一部を大学が補助。学部3年生の6人がカンボジアの首都プノンペンなどで活動しました。



県大から「世界」へ

◆出席者
 澤田梨加(文学部日本語日本文学科)
 徳永咲希(総合管理学部総合管理学科)
 中村理加子(文学部英語英米文学科)
 森涼桜(総合管理学部総合管理学科)
 東莉乃(文学部英語英米文学科)
 ※欠席者 横尾小百合(文学部英語英米文学科)

海外インターンシップ経験から得た実践力

座談会

2020年度にスタートした「もやいすとグローバル育成プログラム」の参加学生の中から、2022年9月、3年生6人がカンボジアの政府機関・民間企業・NGOでインターンを経験しました。今回、5名の参加者が、現地で体験したことや感じたこと、後輩たちに伝えたいことなどを語り合いました。

(以下、敬称略)

「もやいすとグローバル育成プログラム」参加によって開けた道

澤田 参加のきっかけは、もともと英語が好きだったから。いつか海外に行きたかったんで、「よし、これに乗っかろう」と思いました。

徳永 私も同じです。それに4年かけてやり遂げたら、大学生活の集大成になるんじゃないかと。行き先がどこであれ、インターンに参加するつもりでした。

中村 私は英語が好きなので、単位が欲しくて。英語英米文学科なので、いつか海外に行きたいと思っていました。今回のインターンは、経済的な負担が少なかったから。

森 高校まで座学だったので、もっと実践的に学びたくて参加しました。正直、インターンは他の国が希望だったけど、カンボジア行きは一生に一度のチャンスかもしれないと思って決めました。

東 将来、海外の企業や団体が働きたいと思っていて、実践的な英語を学ぶ良い機会でした。カンボジア行きは、皆と滞在先が同じだから、長期間でも頑張れるんじゃないかという安心感が後押しになりました。

異文化の中で試された柔軟性と主体性

東 私の受入先は「カンボジア日本人材開発センター」(CJCC)。カンボジアと日本の文化・教育交流の場や、カンボジアでの日本語プログラムなどを提供している機関です。そこで、日本へ留学したい大学生向けのイベント運営に携わり、サイトやポスターづくり、SNS発信などに関する業務を行いました。

森 私と中村さんは、ココロギを加工販売する企業「エコロジー」で、妊婦の栄養改善プロジェクトに携わりました。新規プロジェクトで、しかも最終週にはイベント開催のミッションが……。1週目は約60軒の病院にメールを送り、連絡が取れた病院を直接訪問して、妊婦の栄養状況について調査しました。消費者に突撃インタビューも行いました。皆とても優しくかった。カンボジアでは、揚げたココロギを食べるのが一般的。ココロギに栄養があることを知っているか質問したり、エコロジー社の商品を食べた感想を聞かせてもらったりしました。

中村 2週目は、タケオにある加工工場や養殖農家を見学しました。

森 イベント内容を具体的に考えたのもこの時期。インタビューで



タケオ州にある農場を見学して、ココロギに触れたときの様子(中村理加子)



プノンペンにある Preah Norodom primary schoolで折り紙の授業を行った。言語に拠らない授業を目指し、子ども自身が考えて活動できるようにスライドを作成し、英語での説明は最小限に行った(澤田梨加)

は、9割の確率で「コロナは嫌い」と言われたんですよ。渡航前、「カンボジアの人はコロナが好き」と聞いていたのに……。

全員 (笑い)

森 でも、油を使わないエコロギー社のコロナを食べてもらった時、「おいしい」「欲しい」と言われたことが興味深くて、試食イベントを提案しました。

中村 ただ、最後にね……。

森 会場探しという大きな壁がありました。別件で視察予定のお店に試食ブースがあることがわかって連絡したら、工事を理由に断られてしまって。それでも粘って、「調理はしないので」と再度お願いしたら貸してくれました。

徳永 えー、交渉したんだ。

森 以前の自分なら、一度断られた時点で諦めたと思う。でも、とにかく必死でした。

徳永 私は、国際協力NGO「FIDR」(ファイダー)で、カンボジアの子どもの栄養環境や教育環境を改善するプロジェクトに参加しました。彼らに日本のごみ処理環境を紹介することと、学校給食を例に日本の栄養環境を紹介して生かしてもらうというプレゼンを行いました。現地の学校へ足を運び、ごみのポイ捨てや校内に保健室がない実態も調べました。ただ、新型コロナに感染して、1週間ほど活動を中断。お世話になった部署のプロモーション動画を制作するという最後のミッションがあったため、帰国後もFIDRとやり取りしながら、先日ようやく完成させました。ものすごく達成感がありました。

澤田 動画はどこかで見られるの？

徳永 FIDRの公式サイトで、近日公開です！

全員 おー！

澤田 私がお世話になったのは「WonderLab」(ワンダーラボ)という会社。教育アプリを開発して、教育格差を少しでも改善しようとしている企業です。滞在中は、教育アプリ「Think!Think!」の導入校や塾の見学のほか、子どもたちと保護者、先生にICT教育についてインタビューして、それらをまとめて発表しました。

6つの公立小学校でICT教育についてインタビューし、1校では折り紙の授業も行いました。目の当たりにしたのは、中心部と地方の子どもたちに英語力の差があること。でも、地方でもICT教育が進んだ学校の子供たちは、中心部と同じアプリで楽しく勉強していました。日本はICT教育が遅れているので、学ぶことがあるなど実感しました。



1週目にプノンペンにある Rose maternity clinic でインタビューを行っている様子。真ん中の女性は病院のCEO (森涼枝)

カンボジアでの体験から後輩へ伝えたいこと

森 昨日、「治安が不安」と言ってインターン参加を迷う後輩に会ったんです。私も同じように悩んだからこそ、「まずは挑戦して！」と背中を押してあげたい。想像していた何倍も、いい経験だったから。普通の海外旅行と違って、現地で活動する日本人の人生を知る機会にも恵まれました。

東 私の周りでも、海外行きを先延ばしにしている人が多い。「受入先や滞在先を全部準備してくれて、海外で仕事を体験できる。こんな機会はないよ」と伝えたいです。

澤田 私は、仲間がいることが心強かった。行ってみないとわからないこともたくさんあるし、色々なことを知るためにチャレンジは大事だから、ぜひ。

中村 楽しかったけど、私は人に話しかける事が苦手で、受入先で与えられたミッションが結構つらかったんです。でも、それを乗り越えて帰ってくることができました。後輩の皆さんにもう一つ、海外キャッシングはできるようにした方がいい。現地で現金が無いと何もできません(苦笑)。

全員 (笑い)

徳永 準備して行ったのに、予想外のことが起きたり、対処しきれないことが出てきたり。おかげで、突き進むマインドが鍛えられました。

東 こんなに自分から動かないといけないことを、これまでやったことがありませんでした。3週間、仕事はもちろん、休日の計画なども自分で考えて行動できたなど感じています。

徳永 英語を使いながら働いて、異文化を学ぶこともできました。インターンは、先生や大学、受入先が準備してくれたもの。そうした方々へのリスペクトと共に、自分は受入先でどのように貢献できるか、目的と主体性を持って参加してほしい。きっといい経験になると思います。



インターンシップ最終日の成果発表の様子 (徳永咲希)



CJCCで最後にプレゼンテーションを行っているときの様子 (東莉乃)

初のカンボジア派遣 2人の教授が橋渡し 学生たちが著しく成長し、次への期待も高まる

「もやいすとグローバル育成プログラム」での初の海外派遣に向けては、国際教育交流センター長のレイヴィン・リチャード教授と、JICA(国際協力機構)から本学に派遣された田中耕太郎特任教授(当時)が橋渡し役を務めました。インターンの学生たちと同行し、現地での支援にも奔走しました。海外体験で学生たちがどう変わったのか、話を伺いました。



将来、アジアで ビジネスする人材も出る



国際教育交流センター長

レイヴィン・リチャード
教授

「まじめで与えられたことはきちんとやるけど、自分からは質問や提案はしない」。レイヴィン・リチャード教授は、県立大生に物足りなさを感じていたそうです。「自己紹介では名前と出身校しか話さない。米国の留学生はというと、自分の趣味まで詳しく話します。海外ではいかに自分をアピールして理解してもら

かが大事です」

2年前のセンター設立の翌年度にスタートした「もやいすとグローバル育成プログラム」は将来、海外で活躍する人材を育成するのが目的。その海外実践の場としてカンボジアを選んだのは、「教育的な意味がある」とレイヴィン教授は話します。「イギリスやアメリカに行きたいという学生は多いでしょう。でも、自分から途上国に行く機会はありません。今回はそのチャンス。将来、アジアでビジネスする人材も出てくると思います。良い経験になります」

学生たちは帰国後、全学向けに体験を発表しましたが、「自分たちで準備し、質問にもきちんと答えていました。著しい進歩です」と海外体験での成長に目を細めます。

すごく成長した。 社会を変える人材になれる



国際教育交流センター

田中 耕太郎
特任教授

JICA(国際協力機構)から2020年6月、特任教授として着任。熊本県の国際政策相談役として蒲島郁夫知事のアドバイザー役も兼任しています。来熊前はカンボジア事務所次長だったことが、今回の学生派遣につながりました。

「欧米とは違う経験ができる途上国を勧めました。カンボジアは近くて

コストが安く、親日的。米国ドルが使えて、衛生状態も比較的良い」と田中教授。ただ、かつて戦争や内戦があって、恐ろしい国という印象があり、学生たちも「おどおどしていた」そうです。「現地に行ってみると、人々は優しいし、英語が話せる人が多い。タクシーはアプリで呼べるし、社会システムの多くの部分では日本の方が遅れているかもしれません」

文化や生活習慣が違う現地の人たちと一緒に働いたことで、「学生たちはすごく成長しました。社会を変える人材になれる。次の挑戦につながる」と高く評価します。帰国後の学内での体験発表は、「伝えたいという思いを強く感じました。ほかの学生たちも『良かった』と前向きに受け止めてくれました」。田中教授は2月で退任し、ウクライナの日本大使館に赴任しましたが、「熊本県立大学には途上国への学生派遣を続けてほしい」と願っています。

海外調査のすゝめ

はじめに

私はこれまでに、インドネシア、オランダ、カンボジア、タイ、台湾、バングラデシュ、フィリピン、ベトナム、ミャンマー、ラオスといった国々で調査を行ってきました。いずれも環境汚染に関する調査で、訪れた国のほとんどがアジアの途上国になります。現在、経済成長・人口増加の著しいアジアの途上国では、過去に日本が経験した水俣病などの様々な環境(公害)問題が危惧されています。私は、途上国の調査を通じて、現地の環境汚染の実態を明らかにするとともに、ヒトや生態系への影響を評価する研究を行っています。

地下水のヒ素汚染問題

途上国における環境汚染の問題の中でも、今回は地下水のヒ素汚染について取り上げます。地下水に含まれるヒ素は無機態のヒ素で、発がん性があります。やっかいなことに、この無機ヒ素の出所の多くは人間活動由来ではなく、自然起源なのです。水道の無い貧しい地域では、このようにヒ素で汚染された地下水が利用されているところがあります。そのため、地域住民がヒ素を摂取し続けた結果、皮膚障害やがんなどを発症し、死亡することもあります。世界保健機関(WHO)は、世界で2億人以上がヒ素で汚染された水を利用しており、ヒ素中毒のリスクに曝されていると報告していることから、地下水のヒ素汚染は大規模な公衆衛生問題として認識されています。

一方、途上国現地の人々に聞いてみると、「ヒ素って何?」という人もいれば、「沸騰させれば大丈夫で

研究活動紹介

教授 阿草哲郎
環境共生学部 環境資源学専攻

しょ?』という人もおり、ヒ素について全く分かっていないことが分かりました。環境教育の重要性を感じます。ちなみに、沸騰させると水は一部蒸発しますがヒ素は残るので、結果としてヒ素濃度が高い水を作ることになってしまいます。

実際に地下水を分析していくと、WHOの基準値以上のヒ素が検出されることも少なくありません。興味深いことに、場所によってはヒ素だけでなく他の重金属も高い濃度を示すこともあり、地下水の複合汚染やヒトへの複合曝露の影響も懸念されることが分かってきました。これらの結果は、「From KENDAI to the World」というモットーの下、学術成果として発表するだけでなく、現地の人々にも伝えることで、環境改善の一助となるように努めているところです。

おわりに

海外調査は大変ですが、新たな知見を得るだけでなく、様々な人たちとの出会い、習慣、文化、自然、食事を楽しめるのも魅力です。現地の人々には英語も通じませんが、笑顔とジェスチャーでなんとか出来ました。旅行ガイドブックにも載っていない未知との遭遇、皆様もいかがでしょうか。

プロフィール

広島県出身。

2015年から本学に勤務。

趣味はラーメンサンプリング、サッカー・フットサル、ママチャリ旅。



バングラデシュのカレー。朝、昼、夜、3食カレー。1度の食事で、たくさんの種類のカレーをモリモリ食べています。辛いのが苦手な人は大変です



カンボジアの井戸。緑色のマークは飲んでも安全、赤色のマークは飲むと危険を意味しています。しかし、一部の緑色のマークの井戸の水(地下水)からも、WHOの基準値を超える高濃度のヒ素が検出されることもあります



ベトナムの子供たち。調査で疲れてヘトヘトになっても、この笑顔に救われることが何度も。この子供たちの未来のために、役立つことができればとの思いで研究を続けています

大学の動き

「徳富蘆花サミット～もっと知ろう 徳富蘆花～」を開催しました

2022年11月20日に「徳富蘆花サミット～もっと知ろう 徳富蘆花～」を開催しました。学生を含め110名を超えるご応募があり、多くのご来場をいただきました。

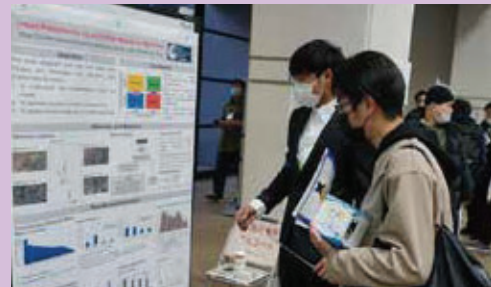
半藤英明教授の司会により、米岡ジュリ・熊本学園大学教授、平石岳・皇學館大学助教、藤川博昭・後藤是山記念館館長、富士一馬・ミネルヴァ書房編集者、本学の羽鳥隆英准教授の5名が明治の文豪・徳富蘆花の魅力や文学について語り合いました。



第7回 国公私3大学環境フォーラムを開催しました

2022年12月10日に本学環境共生学部が主催、福岡工業大学社会環境学部、長崎大学環境科学部の共催でフォーラムを開催しました。

本学の堤裕昭学長の特別講演に続き、長崎大学環境科学部の本庄萌准教授、福岡工業大学社会環境学部の上杉昌也准教授、本学環境共生学部の石橋康弘教授が講演されました。学部生と大学院生によるポスター発表では、長崎大学環境科学部から3件、福岡工業大学社会環境学部から7件、本学からは水銀留学生を含む大学院生から17件の発表があり、熱心に議論されていました。



韓国・祥明大とオンライン交流会を実施しました！

2022年11月16日、本学が学生交流協定を結ぶ祥明大ととのオンライン交流会を実施しました。

本学では平成2年度より同大学からの短期研修を受け入れてきましたが、一昨年度から新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大の影響により各国への往来ができていない状況が続いているため、昨年度に続き今年度もオンラインでの交流を実施しました。

交流会には祥明大の学生26名、本学の学生13名が参加し、両大学やそれぞれの地域の紹介、グループに分かれての自己紹介やディスカッションを楽しみました。



2022年度 認定看護管理者教育課程サードレベル 全受講者19名に修了証を交付

本講座は、2014年にCPD(継続的専門職能開発)プログラムの一環として始まり、2022年には文部科学大臣から「職業実践力育成プログラム(BP)」に認定されました。

2022年度は、7月25日(月)～9月30日(金)の期間で開講。県内はもちろん、遠くは関西から医療を最前線で支える看護職の皆さんが集まり、質の高い組織的看護サービスを提供するために必要な知識やスキルを学びました。総合管理学部の看護、公共・福祉、ビジネス分野をはじめとする本学教員と外部講師による多彩な講義や演習は、県立大学ならではの特徴ある講座として高い評価をいただきました。

受講後、受講生は、課題レポートを提出。審査の結果、12月に全員の修了が認定されました。



米Appleの役員が来学し、飯村研究室を訪問されました！

2022年12月12日、Appleのワールドワイドマーケティング担当 上級副社長(SVP)のGreg "Joz" Joswiak氏が来学され、総合管理学部 飯村伊智郎教授の研究室を訪れました。

飯村教授が当研究室の概要や教育研究方針を説明した後、2022年6月にAppleが開催したWWDC22 Swift Student Challengeで入賞した「WA-color (和色)」やApp StoreのStoryに掲載された「ふるジック」といった学生た

ちが開発したアプリケーションを、学生たちが自ら紹介するなど、Joz氏と意見交換をしました。



熊本県立大学国際シンポジウム2022を開催しました

2022年10月21日に熊本県立大学国際シンポジウム2022「台湾をめぐる経済と安全保障～日本の課題を論ずる～」を開催しました。

ジェトロ・アジア経済研究所の川上桃子・上席主任調査研究員と村井友秀・東京国際大学特命教授の基調講演に続き、パネルディスカッションでは川上氏と村井氏に加えて岩田清文・元陸上幕僚長、平野有益・熊本県立大学客員教授、徳地秀士・平和・安全保障研究所理事長がパネリストとして登壇、本学理事長の白石隆がモデレーターを

務めました。

参加者アンケートでは9割以上の方に「大変よかった」、「よかった」とご好評をいただきました。



就職活動をはじめ、多彩に学生をサポート

『ウンスカルタ』保護のための ゲームアプリを開発し感謝状！！

総合管理学部・高田晃、幸弥大成、猿渡優花、油布明、青山喜春（森山ゼミ）

16世紀半ば、渡来したポルトガルの船員たちから伝わった南蛮カルタを日本で作りかえたのが「ウンスカルタ」です。全国でも人吉球磨地域にだけ残り、熊本県から重要無形民俗文化財に指定されています。

この「ウンスカルタ」を全国に知ってもらうことをゴールとし、共同自主研究（後援会主催）でゲームアプリ開発に取り組んだ学生達に「鍛冶屋町通りの街並み保存と活性化を計る会」会長の立山茂様から感謝状が贈られました。

総合管理学部の高田晃さんは「アプリの開発方法も分からず、学びながら少人数で製作する過程が大変だったが、やって良かった」と話していました。

後援会では共同自主研究に対し助成を行っています。



※新入生へは、本学合格通知の際に、後援会の説明及び入会・会費納入のお願いをしております。まだ未入会の方は、充実した学生生活を送るためにも後援会事業をご理解いただき、是非ご加入ください。年次途中であっても随時入会を受け付けております。

後援会だより

《就職対策事業》

- 就職対策講座（公務員試験対策、就職活動実践等）の助成、資格取得及び講座受講等助成 他
- 就職セミナー・各学部による就職支援事業・在学生就職アドバイザー配置支援、TOEIC® IP学内試験への実施支援、福岡地区合同企業説明会参加助成、就職・進学写真代助成、保護者用就職ガイドブック作成配付

《学生活動支援事業》

- サークル活動費助成、白亜祭・PUK!リンピック開催経費助成、体育委員会主催サマーキャンプバス代助成、全国大会等出場助成 他
- 学生用カラーコピー機の設置、コピーカード配布・販売、食育支援（野菜スープ提供）、インフルエンザ予防接種費用助成 他
- 学生のリクエストに応じ図書を購入し図書館へ配置 他

《国際交流推進事業》

- 海外留学助成、留学対策講座助成、留学生による学生等向け語学講座開講支援 留学生危機管理サービス加入助成 他

《教育研究推進事業・その他》

- 共同自主研究への助成、現地学習バス借上助成、インターゼミナール大会等への参加助成 他
- 卒業式のガウン貸与、記念品贈呈 他

活き活き元気種

このコーナーでは地域で活躍する熊本県立大生の声をお届けします。



オープニングでの実行委員長あいさつ

最後にステージ上で記念写真

白亜祭実行委員会

白亜祭実行委員会 委員長 西山 凜(文学部英語英米文学科3年)

白亜祭 3年ぶりに対面で開催！

白亜祭実行委員会は、熊本県立大学の学園祭である「白亜祭」を盛り上げるべく、ステージ企画や装飾、サークル出店の管理など、白亜祭の運営管理を行う委員会です。58回目の今年度は1年生39人、2年生48人、3年生42人の計129人で活動しました。

白亜祭は、新型コロナウイルス感染症の影響で、令和2年度は悲嘆の中止。昨年度は試行錯誤の末、YouTubeにてオンラインという形での実施でしたが、今年度は3年ぶりに対面で開催することができました。

今年度、白亜祭のテーマは、「Reborn～No Haku, No Life～」。このテーマには、2年間対面で開催することができなかった、熊本県立大学の学生にとって欠かせないイベントのひとつである白亜祭を今こそ蘇らせたい、という実行委員会スタッフ全員の熱い思いを込めました。

3年ぶりの対面開催ということで、様々な場面であれこれ模索しながらの活動でしたが、先輩方の助言もいただきながら、実行委員会スタッフ全員が一丸となって一步一步着実に開催に向けて準備を行い、11月12日午前9時30分、晴天のもと第58回白亜祭がスタートしました。

オープニングの後、吹奏楽部の晴れやかな演奏で始まったステージでは、目玉企画のミスミスターコンテスト、おしゃれ※)、カラオケ、各サークル等による充実したパフォーマンス、お笑い芸人さんによるライブなどが行われ終始来場者を沸かせました。また、作品の展示や模擬店も合計20の団体がを行い、大学の各所で賑わいが見られました。そして、2日目の最後のステージ企画「do DAC」のダンスパフォーマンスを終え、表彰式、エンディングを迎えました。2日間を通して、本学の学生はもとより、地域の方

等にも多数ご来場いただき、盛況のうちに白亜祭を終えることができました。

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、大学に入学して以来予想外のことも多く、思い描いていたような大学生活を送ることができなかった私たちですが、学生の皆さんには、思う存分楽しんでいただけるような白亜祭を目指して活動してきました。私たち実行委員会のこのような思いの詰まった第58回白亜祭が、皆さんの熊本県立大学でのいい思い出の一つとして残れば、実行委員会一同にとって何よりも嬉しいことです。来年もよりよいものを作るべく、精進していきます。

※学生とショップが提携しておしゃれを発信する企画



書道部のステージパフォーマンスで書かれた白亜祭のテーマ

完訳 マルコムX自伝

マルコム X、アレックス・ヘイリー 著

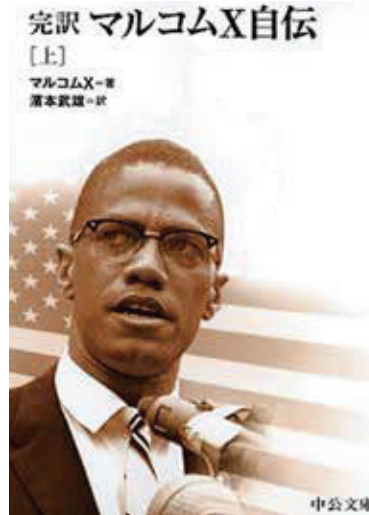
アメリカ合衆国で2020年に、白人警官が黒人男性を死に追いやった「ジョージ・フロイド事件」で、「ブラック・ライブズ・マター」という言葉が目されました。実際に、海外出張などで、街中で多様な肌の色をした人々や、様々な習慣を目の当たりにすると、人種問題を肌で感じざるを得ないことがあります。

人種差別は、合衆国では1960年代の公民権運動で大きく注目されました。その際に、キング牧師と双璧を成したのが、マルコムXです。キング牧師は「私には夢がある」と人種融和を演説で呼び掛けました。それと比べると、マルコムXには武闘派のイメージがあると思います。しかし彼の人生は、差別やそれへの悩みと誠実に向き合い、なおかつ家族への想いを忘れなかった、実直なものでした。実は彼の夢は、言語学者になることでした。彼が社会運動にまさに命をかけてコミットした一方で、基礎科学を含めた学問を好んでいたことには、「文学や言語学を学んで何になる」と悩んでいた、若い頃の私も、勇気づけられました。

※本の表紙は以下からお借りました。
<https://www.chuko.co.jp/bunko/2002/03/203997.html>

出版社：中央公論新社（中公文庫） 出版年：2002年
上下巻

ISBN978-4-12-203997-1（上）
ISBN978-4-12-203998-8（下）



文学部
英語英米文学科
准教授
田中和也

人事情報

●採用 (令和5年4月1日付)

[文学部]

助教 萱嶋 崇

[環境共生学部]

准教授 斎藤 達也

[総合管理学部]

助教 劉 鷓

助教 エロネンユーソ カレビクリスティアン

[共通教育センター]

教授 西本 陽一

准教授 李世恩

●昇任 (令和5年4月1日付)

[環境共生学部]

教授 友寄 博子

[総合管理学部]

教授 河西 卓弥

准教授 関 智弘

[共通教育センター]

教授 石井 佳世

教授 青木 朋子

教授 モロー ジェフリー スチュワート

●退職 (令和5年3月31日付)

[文学部]

教授 虹林 慶

[環境共生学部]

助教 谷村 綾子

●令和5年度 学長等について

[学長]

堤 裕昭

[副学長]

鈴木 元

[文学部長]

村尾 治彦

[環境共生学部長]

石橋 康弘

[総合管理学部長]

澤田 道夫

[共通教育センター長]

山田 俊

[文学研究科長]

米谷 隆史

[総合管理学部・共通教育センター]

教授 進藤 三雄

[環境共生学研究科長]

白土 英樹

[アドミニストレーション研究科長]

宮園 博光

[図書館長]

江崎 一郎

[地域・研究連携センター長]

柴田 祐

[デジタルイノベーション推進センター長]

飯村 伊智郎

[国際教育交流センター長]

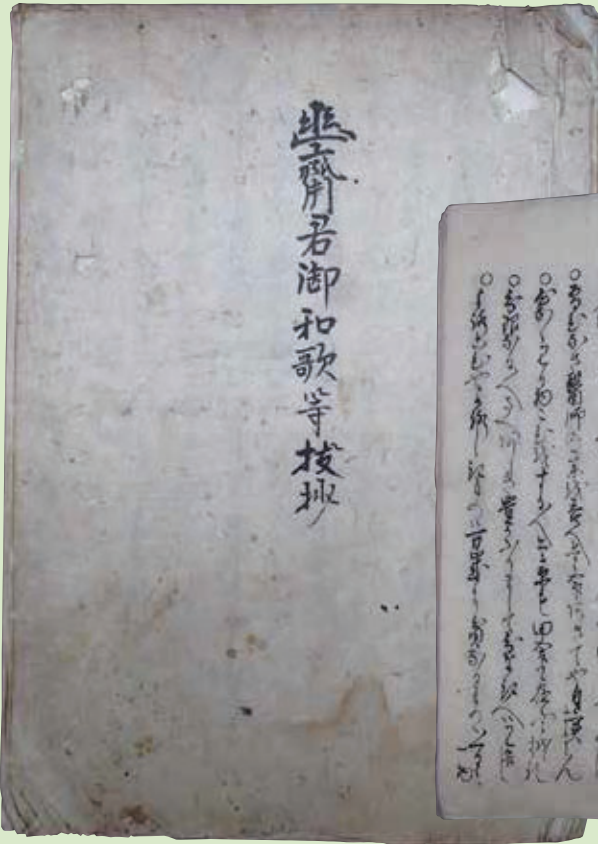
レイヴィン リチャード

[キャリアセンター長]

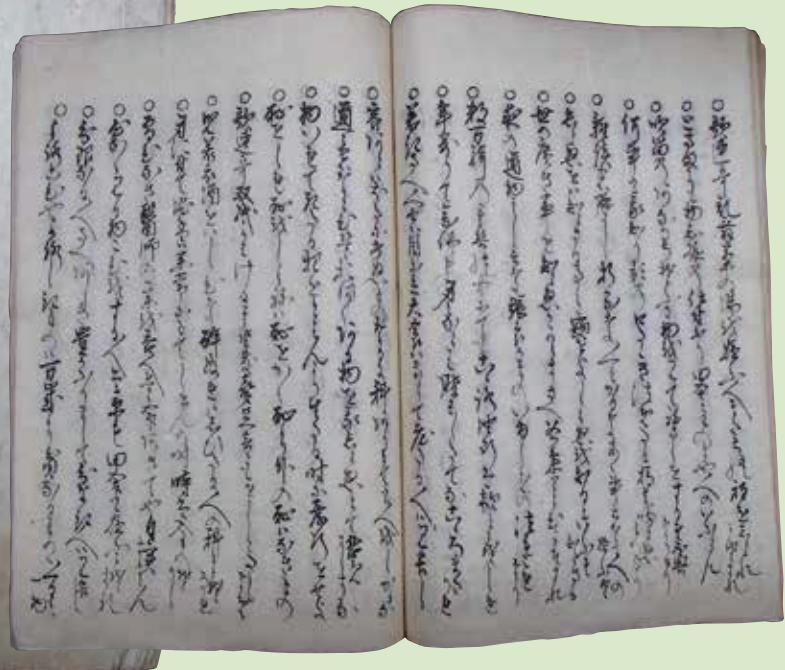
丸山 泰

[保健センター長]

下田 誠也



図版1 表紙



図版2

幽齋君御和歌等抜抄 写本仮綴じ一冊

ただいま、肥後熊本藩藩主家の祖、細川幽齋の評伝に取り組んでいる。

彼の足跡をたどる時、虚実乱れて様々な挿話に行き当たる。本書も、表題の示すごとく幽齋の和歌事蹟を、諸書、諸記録から江戸時代に抜き書きしたもののようなのだが、史実を探るうえでは相当に用心してかからねばならない。だが、幽齋がどのようなイメージのもとに後世語り伝えられたかを窺うには、格好の一書である。参考までに彼の作として伝えられる教訓歌をいくつか紹介しておこう。「歌 連歌 乱舞 茶の湯を嫌ふ人 そだちの程を しられこそすれ」(図版2:右丁冒頭)、「恥を

しれ 恥をしらねば 恥をかく 恥より外(ほか)の恥はなきもの」(同:左丁四首め)、いやなかなか手厳しい。

実は、熊本大学寄託永青文庫に『幽齋君御事蹟并御和歌等抜抄』という上下二冊の写本があり、本書はその上冊に多く一致するが、永青文庫本の方がやや記事が多い。ただし、永青文庫本からの転写とは思われないところもあり、両書の関係についてはなお一考が必要である。

解説:文学部 教授 鈴木 元

「春秋彩」へのご意見・ご感想をお待ちしています。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
 いただいたご意見は、今後の広報誌編集の参考にさせていただきます。
 〒 862-8502 (住所記載不要)
 熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行
 FAX 096-384-6765 E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行：熊本県立大学

〒 862-8502 熊本市区月出3丁目1番100号
 TEL 096 (383) 2929 (代)
<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/>